

Chapter III 特別調査

資料 | 全国コミュニティシネマ会議2019採録

Working group Discussion

やっぱり、ここで映画をみたい
映画館をつくる／映画館を再生する

櫛桁 きょうは、「やっぱり、ここで映画をみたい—映画館をつくる／映画館を再生する」というテーマで分科会を行います。2017年に高崎市で行われた全国コミュニティシネマ会議で登壇したときに、会場から「映画館をつくるにはどうすればいいか」と質問されて「全力で止めます」と答えましたが、猛省して、きょうの分科会の司会をつとめさせていただきます(笑)。

まず、登壇者の皆さんにご自身の映画館についてプレゼンテーションをしていただきます。

Presentation 1

「日本で一番古い映画館」を再生

| 上野迪音

高田世界館(上越市)

高田世界館は、1911年(明治44)に建てられた「日本で一番古い映画館」のひとつと言われています。当時のままの内観を残している貴重な劇場で、国の登録有形文化財や近代化産業遺産にも指定されています。芝居小屋としてスタートしているので舞台があって、天井には特徴のある装飾が施されています。映写室には35ミリフィルム映写機も残っていて、現在でも時々フィルム上映を行っています。最近では、まちづくりの新たなモデルとしても注目され、行政の視察も少なくありません。昨年、まちづくり関係の助成金で映画館の前の広場を取得することができました。

1911年に「高田座」という芝居小屋からスタートし、1916年に「世界館」という常設映画館になり、その後「高田東宝映画劇場」「高田セントラルシネマ」「松竹館」等名称を変えつつ営業が続き、1970年代には「高田日活」という成人映画館になっていました。2007年の高田日活閉館後、2009年に「NPO法人街なか映画館再生委員会」がオーナーから譲り受け、「高田世界館」として運営することになりました。

現在では上越市の「顔」のひとつになり、賑わっていますが、2007年に一度閉館するまでの約30年間は日活の成人映画館だったため、地域コミュニティから切り離された存在になっていました。また、オーナーから譲り受けた当時は老朽化がかなり進んでおり、雨漏りもひどい状態でした。まず建物を改修する必要があったの

パネリスト

上野迪音 [高田世界館]

舟橋一浩 [川越スカラ座]

チェ・ヒョンジュン [ミリム劇場(韓国)]

梶原俊幸 [横浜シネマ・ジャック&ベティ]

司会

櫛桁一則 [みやこ映画生協|シネマ・デ・アエル]

高田世界館

運営団体

NPO法人街なか映画館再生委員会
新潟県上越市本町6-4-21
(上越市人口:約19万人)

スクリーン数 1

席数 181席

上映設備 DCP/35mm/BD/DVD

年間上映本数

約80-90本(フィルムは5本程度)

年間観客動員数

約10,000人(映画上映のみ)

近隣の映画館

JMAXシアター(上越市)

—

高田世界館についてはp.082参照。

高田世界館外観(左)

天井装飾(右)





マサラ上映



館外コンサート



椅子再生プロジェクト



ジャック&ベティ外観

で、寄付を集め、助成金を得て、屋根瓦や椅子、外壁の修理を行い、映画館として人を入れられるようにしました。一番不満が多かったトイレも助成金で新しくすることができました。

ハード面の補修や維持とともに、「成人映画館」というそれまでのイメージからの脱却も重要な課題で、映画館の再生に協力してくれる人を増やし、市民活動として盛り上げていく必要がありました。最初の頃は、映画上映だけでは人が集まらなかったのが、餅つき大会などもやりました。その様子が全国区のテレビでも放映され、多くの方から励ましの声をいただきました。

私は、NPO体制になってから5年後、2014年から高田世界館の運営に関わるようになりました。ちょうどその頃は建物の保存活動がひと段落して、今度は保存から活動へとフェーズが移っていかうかという時期でした。上越市の人口は19万人ですが、直江津市と高田市、周辺市町村が合併した市なので、高田世界館周辺で考えると10万人ぐらいで、映画人口が少ない場所だったので、本当に映画館としてやっていけるのか不安でした。NPO体制となった当初は、貸館の方が収益率がいいので自主事業は少なく、散発的な上映しかしておらず、上映日数も限られていて映画館としてはさびしい状況でしたが、2014年以降、上映作品やイベントが少しずつ増えて、週2日だった休館日が2015年8月からは火曜日のみとなり、1日4回上映が定着して、お客さんからも「ようやく映画館らしくなってきたね」と言われるようになりました。当初は、地域コミュニティでの足場固めをするため、内容は地味でも地域に根差した題材や課題を扱った作品をやって、シニア層や地元の子どもたち、問題意識がある人に来てもらうようにしました。特に、シニア層に受ける作品が足場固めには有効だと感じました。また、「日本最古の映画館」、「市民の手による再生」といった映画館再生の物語、「ストーリー」が拡散され、多くの人の共感を得ることができて、地域の人たちにも徐々に応援してもらえるようになりました。若い世代の人も含め、ボランティアスタッフとして映画館の運営を手伝ってくれる人も増えていきました。

2015年の全国コミュニティシネマ会議のときに作成した資料を見返すと、当時は1日の観客数が16人、4回上映なので、1回平均4人という非常に厳しい数字が出てきます。それから4年経ち、いまでは観客数は倍近くに増えています。当時もいままシニア層が観客の中心ですが、映画を上映するだけでなく、マサラ上映や、応援上映をやったりもしますし、映画館としては異端かもしれませんが、音楽のコンサートや婚活イベント、観光客や職場体験なども積極的に受け入れています。高田世界館という場所に対して「ここならいろんなことをやってくれる」というイメージが、SNSなどを中心に広まっているのを感じます。

活動を続けていくうちに、映画館にできること、できないことも見えてきました。館内では基本的には座ってもらうことしかできないので、少しずつ、映画館の外にも活動の場が移ってきています。多くの人が集まる場所になるよう、映画館内だけでなく広場も含めて活用していきたいと考えています。

Presentation 2

映画の舞台“黄金町”の映画館

梶原俊幸

横浜 シネマ・ジャック&ベティ

「シネマ・ジャック&ベティ」は、2005年に一度閉館してすぐに別の会社が再開しましたが、2007年3月に、私たち「エデュイット・ジャパン」が運営を引き継ぎました。

2005年当時、私はまちづくりボランティアとして黄金町を中心に活動していて、再開した映画館を応援したい気持ちで、劇場ロビーで交流会を開いたり、周辺の街歩きマップをブログでアップしたりしました。そうしているうちに、再開していた会社から「そういう活動を続けるなら、いっそのこと映画館ごと引き受けないか」と提案されました。我々が断ったらまた閉館してしまうかもしれない、できるところまでやってみようと思ひ引き受けることにしました。

ジャック&ベティがある黄金町駅周辺は、映画と大変ゆかりのある場所です。黒澤明監督の『天国と地獄』は黄金町が舞台ですが、当時の黄金町は大変危険な地域だったので、結局セットで撮影したと聞いています。ほかにも林海象監督の『我が人生最悪の時』や、中村高寛監督のドキュメンタリー『ヨコハマメリー』も劇場のすぐ近くが舞台になっています。映画の撮影が行われ、舞台にもなったこの町に映画館があるべきだと思ひ

いるので、これからも映画館を続けていきたいと強く思っています。

運営をはじめた当初は、お客さんが本当に少なく、どうやったらお客さんに来てもらえるのかと考え、舞台挨拶やバリアフリー上映、手話上映や映画感想文コンクールなど、本当にいろいろなことをやりました。試行錯誤でやってきたので、何が一番効果的だったのかはわかりませんが、一番よかったと思っているのは「ジャック&ベティ・サロン」という観客との交流会を毎月続けてきたことです。10年以上やっていますが、最初の頃は「どうやったらお客さんがくるのか」「また来ていただくにはどうすればいいのか」といったことをサロンに参加した人に直接に聞き、「こういう作品をやったらどうか」「他の劇場はこんなことをやっているよ」といったことを教えていただきました。サロンの参加者は、2、3人のときもあれば、20人も集まることもあります。「出張サロン」も実施していて、映画サークルに呼ばれば飛んでいって映画談義を聞いたり、その後の飲み会にも参加しています。カラオケボックスで映画の会をする団体があり、その会は少々映画について話した後、映画の音楽をみんなで歌います(笑)。他にも、中華街の「同發」という老舗の中華料理店で毎年開催している「中華街映画祭」でも交流会をやっています。

劇場の外に出ることも大事だと思っていて、中華街で映画祭をやったり、大岡川の河原や、桜が満開の時期には公園で、あるいは、みなとみらいにある「横浜みなと博物館」で野外上映会をやったり、商店街のイベントで『アンパンマン』を上映したり、元町にある老舗レストラン「霧笛楼」でも上映会をやりました。「濱マイク大回顧展」という特集をやったときには、伊勢佐木町商店街の真ん中で豪華ゲストをよんでイベントをやりました。映画館の外で上映会をやることで、より幅広い層の人たちに映画の面白さやジャック&ベティという映画館の存在を知ってもらうことができます。

劇場グッズの制作・販売もしていますし、ネットショップも開設していて、ミニシアター系の作品のパンフレットの販売をしています。上映中はスタッフの手が空くので、その間に発送業務をしていて、意外かもしれませんが、少しは収益があがります。ミニシアター系の上映がないエリアから注文をいただくことも多いです。

引き継いだ当初はお客さんが少なすぎて、家賃も払えず、様々なトラブルがあったのですが、最近では年間観客数は12-13万人で推移しているので、動員という意味ではある程度落ち着いています。おかげで、2016年には劇場のシートを変えることができて、古いシートは希望する方に差し上げました。

課題は作品数が多いことです。最近では、「金曜日スタート」というものまで始まり、スケジュールを3Dにしたいくらい、情報量が多くなっています。

最後に、「濱マイク」シリーズが撮影された「日劇」という劇場についてお話しします。日劇は、ジャック&ベティの向かいにあった大変立派な映画館です。2007年3月当時にはまだ建物は残っていて、ジャック&ベティを引き継ぐ際に日劇のオーナーさんに相談に行ったところ、「君たちは日劇もやれるのか」と言われ、「いまは難しいです。まずはジャック&ベティからやってみたいと思います」とお答えしました。まだしばらくは残っていると思っていましたが、その直後のゴールデンウィークには取り壊しが始まって、現在はマンションになってしまいました。

横浜シネマ・ジャック&ベティ

運営団体

株式会社エデュイト・ジャパン
神奈川県横浜市中区若葉町3-51
(横浜市内人口:約370万人)

スクリーン数

2

座席数 132席/144席

上映設備

DCP/35mm/16mm/BD/DVD/
DV-CAM/DVC-PRO/HDV/
mini-DV/VHS

年間上映本数 約400本

年間観客動員数 約12-13万人

近隣の映画館

横浜シネマリン(横浜市)、
キノシネマ横浜みなとみらい(横浜市)ほか多数

ジャック&ベティ・サロンの様子



在りし日の「日劇」

映画館は非常に効率の悪い建物で、他に使い途がありません。特に都心部では、放っておいたらすぐなくなってしまうのだということを実感しました。その思いをいままち続けて、何とかジャック&ベティを続けていかなければと思っています。

最後にもうひとつ、中川龍太郎監督の新作『わたしは光をにぎっている』が11月15日に公開されますが、撮影で当劇場が使用されています。この作品では、銭湯など都市開発で失われていくものを描いていますが、そのなかで、閉館する映画館という設定で出てきます(笑)。ですので、私はこの劇場を守っていかなければいけないと思っています。

Presentation 3

「蔵のまち」川越に残る唯一の映画館

| 舟橋一浩

川越スカラ座



川越スカラ座外観(上)、ロビー(下)

川越スカラ座

運営団体

NPO法人プレイグラウンド

埼玉県川越市元町1-1-1

(川越市人口:約35万人)

スクリーン数 1

座席数 124席

上映設備 DCP/35mm/BD/DVD

年間上映本数 約90本

年間観客動員数 約17,000人

近隣の映画館

ユナイテッド・シネマ・ウニクス南古谷

(川越市)ほか

「川越スカラ座」は、明治38(1905)年に「一力亭」という寄席としてスタートしました。それからいくつか名前が変わりましたが、明治40年に「おいで館」となり、さらに、大正10(1921)年に「川越演芸館」に改称され、この頃から活動写真を上映し始めます。当時は人気活弁士の興行を行って大変賑わっていましたが、昭和15(1940)年にいまの映画館の原点となる「川越松竹館」となり、昭和38(1963)年に「川越スカラ座」になりました。2007年に一度閉館しましたが、同年8月18日に「NPO法人プレイグラウンド」により復館します。

プレイグラウンドは、私の小学校・中学校の同級生や同級生の兄弟8人で2005年7月に任意団体として活動をスタートし、現在はNPO法人として「川越市及び周辺市民のため、文化活動及び交流拠点の創設、市民による文化活動の参画、文化事業の享受の機会を図るため、既存資源の最大限の活用を通して、豊かで楽しい社会生活の実現と中心市街地の活性化を促進すること」を目的として活動しています。川越市は人口35万人ですが、観光地としてにぎわっている旧市街を中心に、年間700万人以上の観光客が来ます。

一方で、地元の人たちが楽しめる居場所がだんだんなくなっている状況があるので、住民たちも楽しめる居場所づくりを推進しようと考え、川越のまちなかにある唯一の映画館であった川越スカラ座の運営を始めました。

シネコンが本格的に増え始める直前の2006年2月に映画館「シアターホームラン」が閉館し、川越市内にはスカラ座しか映画館がなくなってしまいました。プレイグラウンドでは、スカラ座の前の支配人にご協力いただきながら、2006年5月に川越スカラ座で初めてイベント行い、それ以降、イベントの企画運営を任されるようになり、11月末にオーナーより引継ぎの相談を受けました。そこで、2007年2月にNPO法人設立の申請を行い、5月にNPO法人設立が認可され、賛助会費一口1万円をいろいろな方をお願いして8月には450万円を集めることができました。目標の500万円には達しませんでした。8月に川越スカラ座の復活オープンに漕ぎつけることができました。(賛助会費は2008年6月末までに756万円集まった)2017年には復館10周年を迎えることができ、どうにかこうにか現在に至っています。

Presentation 4

韓国仁川にある「思い出劇場ミリム」

| チェ・ヒョンジュン

昨日もプレゼンテーションをさせていただきましたが、ミリム劇場は1957年に開館した映画館です。日本の映画館の歴史と同じような歴史を韓国の映画館もたどっていて、70-90年代、仁川市には旧都心である東仁川駅を中心に20館以上の映画館があり、多くの観客で賑わっていましたが、2000年代に入り、シネコン全盛の時代になると急激に観客が減少し、ミリム劇場も2004年に閉館しています。建物は残っていて、2014年に仁川市の支援を受けて、再オープンしました。最初はシニア世代向けの映画館(シルバー映画館)として、古典映画を主に上映していました。入場料は通常の映画館より安く、2000ウォン(約200円)で映画を見ることができました。シルバー映画館は、2000年代初めから、韓国各地につくられました。

再開した当初の観客数は1日100人以下でしたが、映画館が広く知られるようになり、現在では1日の観客数

は180人ほどに増えています。映画好きの人もいますが、ただ時間を過ごすために来る65歳以上のシニア世代の方がほとんどです。入場料収入だけでは劇場の維持が難しいので、高齢者施設へ出張上映をしたり、貸館もしています。

ミリム劇場は、DCP対応のDLPは設置できていませんし、職員も高齢者がほとんどで、通常の映画館と比べると足りないことがたくさんあります。大雨が降ると水漏れがして、古い建物なので配水管がどこにあるかわからず、幸い客席ではなく外壁で水漏れしていたのですが、修理の方に修理をするのも危険だと言われて、そのままになっています。

いろいろと問題はありますが、こういう古くからある劇場だからこそできることはなんだろうと考え、ただ映画を上映するだけでなく、高齢者が感じている寂しさに寄り添い、その世代が享受できていない文化的活動という面を補うべきだと考え、高齢者も参加できる文化芸術全般の活動を行うことを目指しています。バリアフリー上映も行っていますし、のど自慢大会や団体鑑賞ができるイベントも定期的に行っています。シンガポールのサックス奏者のライブは予想以上に好評でした。驚かれるかもしれませんが、2階のイベントスペースではアルツハイマー検査を行ったりもしています。

最近では、若手の映画クリエイターたちとの共同企画や、青少年のためのイベントも実施しています。こういった活動には仁川で活動するアーティストが自主的に参加してくれています。ミリム劇場は、観客の99%がシニア世代の映画館ですが、それ以外の1%の観客との出会いを大切に、これからも努力していきたいと思っています。2019年6月には、ジャック&ベティとの共同上映企画「仁川から横浜まで。ジャック&ベティとミリム劇場」を実施しました。今日と明日、ジャック&ベティで第2回の共同企画が行われます。

今回、日本の全国のコミュニティシネマの皆さんのお話を聞くことができ、とても感動するとともに、多くのことを学びました。ここで学んだことを持ち帰って、韓国で様々なことにチャレンジしていきたいと思います。明日も横浜でお目にかかれることを楽しみにしています。〔「ミリム劇場」についてはp.123参照〕

Presentation 5

「シネマライン」閉館後も“映画は続く”

| 櫛桁一則

みやこ映画生活協同組合

きょうは、岩手県の一戸町と宮古市の3つの事例をご紹介します。

岩手県は日本一大きい県ですが、映画館は盛岡市や北上市など内陸に固まっていて、三陸海岸には、青森の八戸市から宮城県石巻市まで映画館がありません。私は沿岸に唯一あった岩手県宮古市の「シネマライン」という映画館を支配人として続けていましたが、2016年9月に常設館としては閉館しました。

一戸町「萬代館」

一戸町は県北にある人口12,300人の小さな町です。ここに、「萬代館」という明治42(1909)年に人形芝居小屋からスタートした映画館があります。1990年代半ばに常設館として閉館した後は一戸町に寄付され、町が予算を出して2008年に大規模に改修して、現在はホールとして、映画祭や音楽ライブ、寄席などに使われてい



萬代館外観

ミリム劇場

運営団体

仁川(インチョン)市社会的企業協議会
仁川広域市東区ファドジン路31
(仁川広域市人口: 約300万人)

スクリーン数

1

座席数

283席(1階200席、2階83席)

上映設備

HDV/DVD/BD/ファイル(PC)上映

年間上映本数

50-60年代の古典映画約150本

インディペンデント映画約50本

年間観客動員数

65,000人(1日平均180人)

有料観客数 55,000人

無料観客数 10,000人

ミリム劇場にきた高校生たち



音楽イベント風景



みやこ映画生活協同組合

シネマリン [1997年4月-2016年9月閉館]

岩手県宮古市小山田2-2-1

(宮古市人口:5.3万人)

スクリーン数 2

座席数 85席/62席

上映設備 DCP/35mm/BD/DVD

年間上映本数 40-80本

[メジャー62%/インディペンデント38%]

封切11%/セカンドラン(順次)89%

年間観客動員数 累計556,502人

(最多…50,273人[2001年])

最小…16,402人[2011年])

シネマリン定期上映 [2017年2月-]

現在「シネマリン」は、いわて生協所有の貸ホール

上映本数 20-26本

●主催定期上映のみ

来場者数 5,714人(2018年度)

●自主上映等は含まれない

釜石PIT定期上映 [2017年2月-現在]

岩手県釜石市大町1-1-10

(釜石市人口:3.4万人)

会場 チームスマイル釜石PIT 100席

上映設備 DCP/BD/DVD

年間上映本数 11-14本

●自主事業のみ

年間観客動員数 845人(2018年度)

●映画祭等は含まれない

シネマ・デ・アエル [2017年2月-現在]

岩手県宮古市本町2-2

スクリーン数 1

座席数 40席

上映設備 BD/DVD

年間上映本数 22本(2018年度)

年間観客動員数 423人(2018年度)

入場者50万人突破のときの様子(上)

震災後の「黄色いハンカチプロジェクト」に

倍賞千恵子さんが来館(下)



ます。私が取材に行ったときは、一戸高校のブラスバンドの練習をしていました。とても多様な活動に使われています。外観の写真を撮っていると、歩いていって高齢の方に「この映画館まだやっているのか」と聞かれ、現在はホールとして利用されていることを伝えたと、「昔の建物がまだ残っているっていうのは安心するね」と言われたことが、大変印象に残っています。

萬代館では、今月は「カシオペア映画祭」という小規模な映画祭が行われます。今年23回目となるカシオペア映画祭は、毎年ゲストを呼んで実施していますが、今年は松田優作特集ということで、村川透監督と俳優の加藤雅也さんが来館される予定です。映写や作品の手配はみやこ映画生協で行っています。

「シネマリン」閉館後のふたつの「マンスリー上映会」

かつては宮古市にも映画館がたくさんありました。昭和30年代には7館もありましたが、昔の建物を残すという発想は宮古市にはありませんでしたし、津波で物理的に破壊されてしまったところもあります。1991年に「宮古国際劇場」という最後に残っていた映画館が閉館し、宮古市には映画館が無くなってしまいますが、市民団体がみやこシネクラブを立ち上げ、年に数回、市民文化会館を利用して上映会活動が続けていました。

上映会は市内外からたくさんの方がきて賑わい、「やはりこのまちにも常設館がほしい」という機運が高まり、1997年に「シネマリン」という映画館が誕生することになります。当時はNPOという法整備もなかったのに、新しくできるいわて生協のショッピングセンターの中に映画館を作ってもらえるよう、いわて生協や行政に打診しましたが叶わず、大きな資本や行政に頼るのではなく、市民一人一人が出資して自分たちの映画館をつくろうと運動を展開、日本で初めて映画を上映する生協「みやこ映画生協」を立ち上げ、シネマリンを開館することになりました。歴代で年間興行収入が一番低かった1996年の翌年開館という、最初から“茨の道”を歩む運命だった映画館でした。

みやこシネマリンは、2スクリーンとも、100席に満たない小さな映画館です。上映本数は、平均年間71本でした。開館当初は40本位で、私が支配人になる前までは、基本的には大手の封切作品のみをやっていました。大手配給会社の封切館となると、ある程度の上映期間や回数をやるのが求められるため、自動的に作品数は少なくなります。私が支配人になってからは、セカンドランやインディペンデント映画を増やしていったので、上映本数は年間70本程度に増えました。観客の男女比は6対4で女性が多く、年齢層では圧倒的にシニアが多かったです。年間観客数が5万人を超えた年もありましたが、震災の影響をまともに受けて、2011年以降は1万6千人まで落ち込んでしまいます。常設館としては、2016年9月に閉館することになりました。入場者が微減するなかでどんなに頑張っても継続するのは難しかったと思いますが、東日本大震災で底を目の当たりにさせられました。

シネマリンでは、1997年4月-2017年9月25日の20年間で921本を上映し、55万6千人の方に来てもらいました。オープニングはレオナルド・ディカプリオ主演の『マイ・ルーム』、閉館上映は『千と千尋の神隠し』と『サウンド・オブ・ミュージック』でした。倍賞千恵子さんが来てくれたこともありました。

常設館閉館後、劇場施設がどうなるのか心配していましたが、先ほど梶原さんもいったように、映画館ってそれ以外に使えないし、壊すのにもお金がかかる。結局、そのまま貸ホールとして活用できることになりました。いまはみやこ映画生協でそこを借りて、月に2回程度、週末を中心に準新作映画上映会をしています。シネマリン時代に苦労して導入したDCP対応のDLPも1台は置いてありますので、そのまま使っています。

もう1台のDLPは、釜石市に2015年に開館した「釜石PIT」という施設に設置しました。みやこ映画生協は、釜石PITを運営する釜石まちづくり株式会社と共催で月1回上映会(シネベット)を行っています。そのほかにも、岩手県沿岸部のホール上映や映画祭、被災者支援上映会なども継続して行っています。

常設館を持っていたときは、次から次へと作品が来るので、一作品に集中して宣伝を頑張ることは少なかったのですが、月1、2回の上映だと、その作品にお客さんが来なかったらこれまで以上に厳しい状況になってしまうので、作品の選定や宣伝は、常設館以上に丁寧にやらなければいけないと痛感しています。シネマリンの閉館前の年の平均入場者数は、2スクリーンで1日平均48人でした。閉館後、月2回行っている定期上映会では、基本的にメジャー作品を上映していますが、1スクリーンで1日58-9人となり、1回当たりの平均入場者数

は増えています。以前以上に、作品を吟味し、丁寧に宣伝活動を行っています。去年は、『人生フルーツ』『万引き家族』『日日是好日』と樹木希林さん関連の作品に救われました。

もうひとつ、「シネマ・デ・アエル プロジェクト」という、2017年に宮古を中心とした市民有志で始めたプロジェクトがあります。宮古市はもともと南部藩(盛岡藩)でしたが、南部の殿様が宮古に来て町割り(区画整備)を始めるときに基準とした「本町」という由緒正しい場所に、江戸時代から続く東屋さんという商家があります。ここにある、国の文化財にも登録されている蔵を提供していただけることとなり、ボランティアメンバーが鼻の穴が真黒くなるまで蔵の中を掃除し、「シネマ・デ・アエル」という上映場所をつくりました。改装を重ねて、ようやく形になってきました。ここで、月に一回、「マンスリー・セレクト」として、メンバーが持ち回りで選んだ作品を上映しています。上映後には必ずトークをつけていて、監督や、上映作品に関係する方に登壇してもらいますが、ゲストが来られないときも、来場者に映画の感想を話してもらい、交流の場を設けています。カフェや地酒の立ち飲みバー、地域特産品や駄菓子の販売などをやることもあります。「シネマ・デ・アエル」という名称には、映画に出会うということだけでなく、上映会に来て人と出会う、新しい物事に会うという意味を込めています。

映写や作品交渉などは、私が引き受けています。シネマリーンではメジャー作品を中心に上映していますが、シネマ・デ・アエルではインディペンデント系の作品やドキュメンタリーを中心に上映しています。月2回のシネマリーンでは上映できない作品を、こちらで補完することができています。ラインナップは本当に幅広く、ドキュメンタリーからエリック・ロメールまで、メンバーが見たいといえば上映します。東京でデザイナーをやっているメンバーがチラシの制作を担当しています。蔵は、映画上映に限らず地域の様々なイベントやワークショップに活用されていて、メンバーの結婚式に使われたこともあります。

「みやこほっこり映画祭」のときには中村義洋監督を招いて監督作品を何本か上映したり、宮古と室蘭がフェリーでつながったことを記念して、室蘭在住の監督を呼んで室蘭が舞台の映画を上映して、上映後には室蘭の方々とビデオトークするという交流イベントも行いました。『人生フルーツ』の上映のときには、台湾と日本で同時に上映して、ウェブでつないで感想を話し合うという企画もやりました。

常設館を復活するのは難しいかもしれませんが、定期的な上映会で、映画をみる場を宮古に維持していければいいなと思っています。

ディスカッション

樋口 ここからは登壇者に集まっていたが、会場の参加者も含めてディスカッションを行います。

映画館が一度閉館したということは「映画館の経営は無理だ」という結論が出ているわけですから、それを復活させるというのは、その場所に対するマイナスのイメージがある中でのスタートになるわけで、本当にいろいろ大変だと思います。そのような状況で、運営団体を設立し再開に至るまでの苦労、これまで運営してきたなかでの課題、人的・金銭的な問題も含め、ざっくばらんにお話したいと思っています。

上野 定期上映を始めて4年程経ちましたが、これからが大変になってくるんだろうなと思います。再生当初は熱があり、その熱で手伝ってくれる人もいましたが、これからはコンテンツで勝負していかなければいけないと思います。客層や上映作品など、自分のやりたかったことは少しずれていると思うところもありますが、この場所を守ることが大前提なので、微増傾向にある観客数を維持しつつ、様々なことを試しています。そもそも、閉館してしまったということは求められていなかったわけで、地域の人にとっては、なくても全然困らないわけです。「この映画やってくれてありがとう」とか「上映が実現できるなんて」と喜んでもらえるのは嬉しいのですが、地域にとってはなくてもいい存在と思われているように感じることも多いのが正直なところです。

舟橋 現在、川越の観光名所になっている蔵の街並みは、30年前までは「古い建物だ」ということで、そのほとんどが大きな看板で隠されていて、観光地になるとは全く想像もできませんでした。「川越蔵の会」という、まちづくりや景観保存等を研究しているNPOがあり、そのなかには私の友人の若手の建築士たちもいました。川越を観光地として売り出そうというときに「蔵の会」の意見も聞いて、蔵を前面に打ち出していく、古いものを残し



シネマ・デ・アエル トークイベント(上)
チラシ(下)

つつ新しいものを取り入れようという考えが出てきました。当時はスカラ座がなくなったら、まちなかから映画館がなくなってしまうという時期でもあり、海外や都内で働いていた友人たちが、私と同じタイミングで川越に戻ってきて、子どもの頃に行っていた映画館が残っていることに「かっこいい」と感じた。そういう価値観を共有できたことと、川越のまちづくりの流れと上手く交わったことが大きかった。お祭りや自治会、育成会など、川越のいろいろな団体が集まるときには顔を出して、協力してもらったことでスムーズに再生計画が進んだように思います。地元で呉服屋や人形屋をやっている仲間たちとのつながりもあったので、話がすぐに広がっていきました。ある程度のお金が集まり、いざ始めてみたところ、映画の興行は全然わかりませんから『ニュー・シネマ・パラダイス』や「ゴッドファーザー」シリーズといった人気の作品を上映しましたが、お客さんはあまり入らない、本当に苦労しました。10年経ってようやく映画館の色みみたいものがでてきて、いまはある程度まではお客さんも戻ってきて、安定してきたかなという感じです。

樋口 私も釜石で定期上映会をスタートしたときに『ニュー・シネマ・パラダイス』をやりましたが、入らなかったです。やってくれて頼まれるわりに、全然お客さんが入らないんですね(笑)。横浜のシネマ・ジャック&ベティは入場者数がどんどん増えて順調にみえますが、現在の苦労とかはありますか。

梶原 ジャック&ベティがある黄金町という町は、黒澤明監督の『天国と地獄』で“地獄”として描かれたこともあるように、売春窟、風俗街というイメージがあって、私たちがジャック&ベティを引き継いだ2007年当時もあまり近づいてはいけない地域という印象がありました。女性のお客さんから「一人で行っても大丈夫ですか」と電話で聞かれたこともあります。同じ頃に黄金町で、アートでまちづくりをしようという動きが始まり、町全体がきれいになってきていたことに助けられました。突然、映画館を引き受けることになって映画上映自体が手探りでしたから、いま考えると相当高い金額で作品を借りてたんだと思うこともあります。

近年は上映作品が非常に増えて、プログラムが複雑になっていることが課題です。オンラインチケット販売システムもまだ導入していないので、若い人がネットでチケットが買える映画館に行ってしまう感じがしていて、チケットシステムの見直しも必要だと思っています。

樋口 韓国の「思い出劇場ミリム」は、非常に郷愁漂う名前ですね(笑)。行政からの支援がある点では日本とは異なりますが、ただ、市長とか文化行政のトップが変わるたびに支援の方針が変わるというのは、不安定な部分もあると思います。それを含めて、現在の難しさや課題はどういうところでしょうか。

チェ ミリム劇場は、市からの支援で再開しましたが、その直後に市長が変わり、早くも危機を迎えました。しかし、それ以降は市長が変わっても、支援が受けられないという状態にはならず、これまで続いています。

ミリム劇場は、仁川市が所管する社会的企業協議会が運営していて、社会的企業協議会の予算とKOFICの支援金、それに事業ごとに申請している様々な文化財団からの助成金で運営費をまかなっています。入場料収入や参加費収入は非常に限られているので、安定的な運営のための予算をどのように確保するかが常にある課題です。

樋口 非営利とはいえ、収入を上げていかないと継続できない部分もあると思います。入場料(約200円)がかなり低いと感じたのですが、これを上げることはできないのでしょうか。

チェ 韓国では2000年代にソウルを含めて全国に7-8ヶ所にシルバー映画館が作られました。それを知った市長が視察に行って、その流れでミリム劇場も開館しました。私自身は、個人的には「シルバー映画館」という言葉は好きではありません。シルバーだけを対象にした映画なんて存在しませんよね。映画館は、映画そのものと出会う場所だと思いますから、“シルバー”と限定するような名称をつけたくはありません。入場料を上げると高齢者にとって財政的な負担になることが懸念されますし、ミリム劇場の近くには同様の映画館(シルバー映画館)があって、そこも同じ入場料で上映しているので、こちらが入場料を上げるとお客さんを失うのではないかと考えられるので、当面はこの価格を維持せざるを得ません。

樋口 シネマリーンの場合、“ナチュラルシルバー映画館”といいますか、目指していないのにシルバーしか来ません(笑)。全国には映画館がない地域がたくさんあり、そこで映画館を復活しよう、新しい上映の場をつくらうという動きがありますが、映画館がなくなった市町村は人口が少ない地域が多く、ミニシアターをやっていくのは難しいところがあると思います。高田世界館がある上越市の人口は20万人ですが、いかがでしょうか。

上野 20万人といっても、上越市は面積が広いので実感としてはその半分程度でしょうか。上越市内にはシネコンがありますが、ミニシアターは周辺地域にありません。最近では配給会社の方とも関係ができてきたので、アート系作品の中でも、割とメジャー寄りの作品が上映できるようになりました。旧市街地にある映画館で、近隣住民の多くが高齢者なので、お客さんからはアート系でもメジャー寄りの作品の方が喜ばれます。再開当初はインディペンデント系の作品を中心に上映していましたが、いまはその割合が低くなっています。人口規模が少ない一方で競合相手もいないということで、割と思通りに上映したい映画を上映できるので、それが入場者数の向上につながっていると思います。

樋口 宮古だと、映画を見に盛岡に行くとなると、最低でも片道2時間はかかりますので、映画館がない町で市民が何を見たいかという『天気の子』や『ボヘミアン・ラプソディ』といった話題作であるのは当然なので、そちらの声にも応える必要があると思いますが、川越ではいかがですか。

舟橋 川越は人口が35万人で、電車で30-40分で池袋にも行けるので、僕自身も中学に入ってからには都内で映画を見ていました。むしろ、このアクセスのよさが映画館としては厳しいところもあります。スカラ座を復館させた直後に川越郊外に8スクリーンのシネコンがオープンしました。閉館した「シアターホームラン」がシネコンの1スクリーンを借りて「懐かしシアター」をやるという話があり、驚きましたが、結局長く続かず、すぐに普通のスクリーンに戻ってしまったようです。シネコンでは上映されない作品を模索して10年経ちますが、実際、競合することはほとんどないです。

そういえば、最近ちょっといいことがありました。『この世界の片隅に』を終戦記念日の時期に上映しているんですが、地元の高校の先生が宿題として「広島への修学旅行前に『この世界の片隅に』を地元の映画館で見てこい」って言ったようで、高校生が300人以上見に来てくれて、スタッフが「人生でこんなに多くの高校生を見るのは初めてだった」と言っていました。そういうのは嬉しいですね。

樋口 大手映画会社の作品はフラット(固定料金)で借りていますか。

舟橋 作品にもよりますが、歩率であっても配給側の割合が高い作品はやりません。

上野 高田世界館ではフラットはやめて、基本的に歩率でやらせてもらえるようお願いしています。

梶原 横浜は300万人都市ですが、縦に大きくて、東京や川崎など別の都市部に出る方が近いエリアもあります。とはいえ、人口が多いということと、映画館がかつてたくさんあったということには大変助けられています。近隣には「横浜シネマリン」や「シネマ・ソベチエント」といったミニシアターもあって、つい最近、「キノシネマ横浜みなとみらい」もできて、2020年には横浜駅にシネコンができます。今後どうなっていくのだと思いますが、お互いに協力合って盛り上げていけたらいいなと考えています。

樋口 横浜のミニシアターで横のつながりはありますか。

梶原 2017年に全国コミュニティシネマ会議を横浜で開催したときに、ミニシアターだけではなく、周辺の上映団体の皆さんにも協力してもらいました。映画館以外にも映画上映をしている団体が多いので、横でつながっていきたくて思っていますが、集まるのが難しいというところはあります。

樋口 梶原さんの話に「サロン」というのが出てきて、一方的に映画を上映するのではなく、お客さんの話を聞き、聞いたことを形にしていますよね。お客さんからしたらそれは嬉しいでしょうし、そういった地道な活動を続けていく必要があると勉強になりました。チェさんの劇場の様子についてもお聞きたいです。

チェ ジャック&ベティがある横浜市と仁川市はよく似ています。仁川市も人口は約300万人です。ミリム劇場がある東区という地域は、仁川の中で最も小さい行政区で、人口は7万人程度です。かつては最も栄えていたエリアだったのですが、現在では旧市街地になり、商店も少なくなってしまいました。若い居住者の多くは都心に通勤しているので、その人たちがミリム劇場に来ることはありません。スカラ座の舟橋さんが話されたような、先生の一声で学生がたくさん見に来てくれたことは、私たちの劇場でもありましたし、他にも皆さんのお話が自分の体験と重なっているので、すごく不思議に思いながら聞いていました。

高齢のお客さんがほとんどなので、常連さんをしばらく見ないなと思っていると亡くなられているということもあります。本当に残念なことですが、そのような状況があるので、観客が増えていくことはなかなか見込めないと思っています。しかし、映画館にたびたび足を運んでくれる方がいるということは、こういう文化的空間が

必要とされていることだと思います。最近、特にインディペンデント映画の上映にも力を入れていて、クラシックだけではなく、多様な映画を上映していきたいと思っています。シルバー世代の方には好まれません、それでも様々な試みをやっていきたいと思っています。

全国各地の「再生映画館」

樋口 会場の中で、映画館を再生して上映活動している方がいらっしゃいますので、お話をうかがいたいと思います。

石橋秀彦〔豊岡劇場〕「豊岡劇場」の石橋です。劇場がある兵庫県北部の豊岡市は、人口が8万人で、面積は東京都と同じくらいあります。豊岡劇場は、1927年に開館した劇場ですが2012年に一度閉館し、2年後の2014年に復活しました。豊岡劇場の場合、「有限会社石橋設計」という民間企業が土地と建物を買って再開したので、賃料は払わなくてもいいというところがあります。民間企業なので、映画の上映だけではなく、隣でレストランを営業したり、他の事業をやって、全体の収支を保つという方式でやっています。上映作品は、ディズニーなどのメジャー作品もやりながらミニシアター系もやっています。そのコンビネーションがこの夏はよかったので、今年の観客動員数は2万人を超えるくらいになりそうです。『トイ・ストーリー4』や『アラジン』などとともに、『新聞記者』のような社会性のある作品も交えることができたので、5年目で人の流れは少してきてきたかなというところです。

下地久美子〔桜坂劇場〕沖縄・那覇の「桜坂劇場」の下地です。桜坂劇場は、元々は1952年に開業した芝居小屋「珊瑚座」で、1953年に映画館「桜坂琉映館」となり、1986年にリニューアルして「桜坂シネコン琉映」となり、日本のメジャー作品を中心に3スクリーンで上映していました。運営会社が映画事業から撤退するというところで2005年4月に閉館しましたが、沖縄在住の映画監督の中江裕司がやっている「株式会社クランク」が建物ごと引きつぎ、その年の7月に再開館し、現在に至るまで運営をしています。

私たちは比較的恵まれていて、前の運営会社が閉館する3年くらい前に3000万円程かけて改装していたので、シートや映写機などはそのまま賃貸で利用させてもらっています。

樋口 家賃を払い続けるのはなかなか大変ですね。桜坂劇場は、映画を上映するだけでなく、カフェやショップなども熱心にやられています。映画の収入と他の収入の比率はどうなっていますか。

下地 5対5です。ロビーが広がったので、空いているスペースを利用して本格的なカフェ（珊瑚座キッチン）にしたり、ショップ（ふくら舎）では映画関係の物販に加え、本やDVD、沖縄の民芸品なども売っています。いまでは劇場の半分くらいは映画以外のスペースになっていて、買い物や食事に立ち寄られる観光客の方も多いです。

榎本雅之〔シネマイーラ〕浜松市の「シネマイーラ」の榎本です。いまの場所はもともと「浜松東映」でした。近隣にシネコンがオープンし、賃貸契約が切れるのを機に、東映社長の岡田裕介さんが浜松東映の閉館を決めました。映画館を壊して平地にすると1500万円くらいかかるので、「タダでそのままおまゐりにやる」と言われました。私は浜松東映の支配人でしたが、55歳で早期退職し、急遽「株式会社浜松市民映画館」を設立、閉館から2ヶ月後にシネマイーラをオープンしました。椅子とか内装は全部変えました。いと思うと、会社を設立したときは、まだ東映の身分があったように思います。株式会社をつくって出資者を募ったときに、浜松市のまちなかの中小企業の方から「よそもの人間が浜松で映画館をやるなら、一回だけの捨て金だから」といってもらったりして、一口50万円で2000万円程が集まりました。

オープン当初は35ミリフィルムが主流でしたが、1年後にはデジタル化の波が来て慌てました。経産省（中小企業庁）の補助金もありましたが、銀行は決算を2期やらないとお金を貸してくれず、集めた資本金は改装等で使ってしまったオープン時には200万円位しか残っておらず、家賃も月60万円だから大変でした。オープンした頃は人口80万人の浜松で、シネマイーラの年間観客数は3万5000人くらいでした。昨日、「シネマテークたかさき」の志尾さんが「12年かけて5万人になった」と言っていたんですが、シネマイーラは7年がかりで5万人を超えました。2018年度は5万5000人でした。

お客さんの70%はシニア層です。近年は『日日は好日』や『モリのいる場所』、『人生フルーツ』、『あん』、『万引

き家族』をシネコンでの上映後にコツコツやりました。樹木希林さんがいなかったら経営危機でした(笑)。

櫛 栞 シネマリーンをやっていた頃も家賃の支払いが大変で、光熱費を含めると80万円払っていました。映画料が滞ると大変ですから映画料を払い、人件費を払うと、家賃を払うお金がないということはよくありました。

チェ ミリム劇場では、再開当時はフィルムで上映していましたが、すぐにデジタルに変わってしまいました。フィルムで上映したくても提供してくれる配給会社はなく、現在はすっかりデジタル上映になっています。といっても、DCPではなく、BDやPCからの出力です。ミリム劇場の映写技師さんは高齢で、プロジェクターやPCの扱いに慣れてないので、時々失敗します。一緒に勉強していますが、1ヶ月に1、2回はミスで映写が中断しています。

櫛 栞 時間がなくなってきました。登壇の皆さんから、一言ずつ、映画館をつくりたい人へのアドバイスをお願いします。

上野 豊岡劇場やスカラ座もそうですが、まさにストーリーや歴史がありますよね。これがとても重要で、高田もかつては城下町だったので周りには古い町並みが残っています。まちづくりの流れのなかに、映画館をリノベーションしようという機運が乗っかることができたのは幸運だったと思います。最近、「カフェシネマ」などをつくって、オンラインの配信サービス「ポップコーン」などを利用して定期的に上映をしているところも増えてますし、スーパーの駐車場に映画館を作られたところもありますが、元々映画館がなかったところに新しい映画館を作ってやっていくのは大変だろうなと気になっています。高田世界館は建物に歴史があり、そこを目当てに来てくれたりもするのですが、何かそういうものがないと苦勞する部分もあるのかなと思います。

舟橋 まちのストーリーや、地元の方々とどれだけ巻き込めるかというのはとても重要だと思います。立ち上げができて、継続していくためには地元の人たちとのつながりが本当に大事です。地元の有力者や思いを分かち合える仲間をどうつかんでいくかというのが最初に大事なところだと思います。

梶原 まだ課題が多いのでこれがいいとかいえる状況ではないですが、地域(横浜市)の広報や補助金をもっと使っていかなければいけないと思っています。そういうところに手が回っていないところが課題だと思います。6月に仁川に行ってミリム劇場との共同企画を実施したときは、韓国の補助金を取ってもらってお招きいただきましたが、ジャック&ベティで共同企画をやろうとしたときに、仁川の方々をお招きしたいと思っても、簡単に補助金が取れない。今回は全国コミュニティシネマ会議と同時期に開催してチェ・ヒョンジュンさんをお招きしたり、ジャック&ベティで開催中の「よこはま若葉町多文化映画祭」の補助金からゲストの謝金を出したりと、他の企画と連動することで何とか開催できました。今回の共同企画で上映する『1991、春』と『姦生(キーセン):花の告白』は、日本未公開の作品で韓国側の制作スタッフに日本語字幕をつけていただき、すぐリーズナブルにお借りしています。今後も、韓国との共同事業に興味がある方がいたら、ジャック&ベティ以外の映画館にも参加していただいて、広がっていけばいいなと思っています。

チェ 今日、この場に参加したことは、私にとって大切な思い出となります。私たちの劇場に来てくださっている観客の皆さんも私たちの劇場で思い出を作りながら、一日一日をどう過ごしていくかを考えていると思います。これからも、日々の思い出を丁寧に積み重ねていく平凡な活動を続けていきたいと思っています。機会がありましたら、今日お会いした皆さんの映画館にも行ってみたいです。ありがとうございました。

櫛 栞 スクリーンは増えても、映画館数自体は減っていて、映画館の空白地帯は増えてきています。小さい町で映画館を運営するのは本当に難しいかもしれない。しかし、だからといってスクリーン体験ができる場がないのは寂しいことだと思います。映画館を一から作るというのは大変な難しさがあると思いますが、いろいろな方法で、地域と一緒に映画を上映できる場がつくれ、それが全国に広がっていけばいいなと思っています。今日はどうもありがとうございました。

—